

勲夫とマミの
居酒屋物語

～勲夫が歴史を作る編～

チラシの効果!?

ついにヨシオの定期口座を崩してしまった。

オレは罪悪感を感じながらも「仕方ないことだ」と自分に言い聞かせて、その50万円を引き出した。

* * * * *

勲夫は小さな和風居酒屋「いさみあし」を経営する41歳。

脱サラして勢い込んで店を始めたのが5年前。

都心から電車で50分。いくつもマンションが建つ予定のある新興住宅地。

その地の展望を見込み、妻の反対を押し切って、チェーン店の店長を辞めて独立開業した。勲夫が見込んだ通り、マンションの建設と共に駅周辺の人口は増え「いさみあし」の売上も上がっていった。

当時、新しい町だったから競合店は無かった。

町のお客さまをほぼ独占できる期間が2年ほど続いた。

しかしというか、やはりというか、人口が増えるに従って周りには居酒屋もできる。

しばらくは人口の増加とお店の増加ペースがいい具合に合っていたので経営には問題がなかったが、そのバランスが崩れてきたのは2年ほど前から。

マンションの建設ラッシュが終わり、人口の増加は落ち着いた。

しかし、お店の増加は止まらなかった。そこそこの繁盛店が並ぶ街は魅力に映ったのだろう。大手チェーンが目をつけ進出してきたのだ。これがかなりの打撃となった。100席以上と、このあたりの個人店の数倍の大きさ。メニューも何でも揃っているし、スタッフの元気もいい、しかも安い。

勲夫の店は、看板では和風と謳っていたがメニューの幅は広がった。

刺身・焼き鳥・サラダ・鍋・パスタ・寿司など、お客さまから要望されればほとんどのメニューは用意した。小さな何でも居酒屋だった。お店の少ない時期から始めていたからそれは必然だった。1ヶ所で何でも食べられるお店が求められていた。

経営が一気に厳しくなったのは、大手チェーンが進出してからだ。

大手もメニューのジャンルは広いから、出しているメニューはほとんど一緒。いや、数は大手の方が多。しかも安い。

今まで常連客だと信じていた人たちは、大手に流れた。

「いさみあし」に来る理由が無くなったのだった。

減る来客数。増える空席。

減る売上。増える赤字。

勲夫の顔は日に日に厳しくなっていた。

* * * * *

1日の来客数が10名を切ることも多くなり、本格的に経営は立ちいかなくなってきた。

最後の定期口座。離れて暮らす長男のヨシオの為に何とか守ってきた貯金だった。父親としての役目を果たせていない今、何か一つだけでも父親らしいことをしてやりたい、その想いでヨシオが高校を卒業する時に渡そうと決めていたお金だった。

ためらいがあった。ヨシオが知っているわけではないのだけど、それを崩すのは約束を破ったことになる気がした。しかし、もう金は無い。それを崩さなければ今月の家賃さえ払えない状態だ。他の選択肢は無かった。

オレはプルプルと指を震わせながら文字盤の「5」と「0」を押した。

ヨシオ、すまない。

何とか盛り返して、また貯めるからな...

貯金を崩したはいいが、それだけでは経営は何も変わらない。少しばかり命が延びただけだ。このお金を基にして、何としても売上を上げなければならない。

オレはチラシを作った。

最後の50万円を使い、1000枚のチラシを刷った。

これに5万円もかかった。デザイン費だけで3万円、高いけどオレにはできないから仕方ない。

1枚も無駄にはできない。オレはこれで売上を上げなければならないんだ。

夜、店を閉めてから自転車をこいでポスティングに回った。焦る気持ちがペダルをこぐペースをあげる。オレは明け方までかけて1000枚のチラシをすべて配り終えた。

寝るのはいつもより4時間も遅いのに、全然眠くならなかった。布団には入るが目はパッチリと開いてしまう。不安もあるが、期待の方がずっと大きい。人は先に希望があると前のつらさは忘

れてしまうようだ。

(明日がたのしみだなあ
このチラシを持ってたくさんのお客さまが来てくれるぞ、きっと)

この淡い期待は、あっさりと崩されることになる。

翌日17時00分、「いさみあし」開店。

(さあ、いよいよチラシ効果の始まりだ。
チラシを持ったお客さまが何人来てくれるだろう)

30分経った。まだひと組も来ない。
2時間経った。まだ、チラシのお客さまはゼロだ。

(おかしい...、そうか！昨日の夜配ったからまだ見てないんだな！
チラシを見るのは今日家に帰ってから。そうすると来てくれるのは明日か...)

そう思う気持ち半分。思い込みたい気持ち半分だった。
その翌日、やはりチラシを持ったお客さまは1人もいない。

(そうか！チラシを見てもわざわざ持ってこないんだな！)

恐らく初めて来店されたお客さまに恐る恐る聞いてみた。初めて見るお客さまだし、きっとチラシを見てくれたんだろう...。

「あの...チラシ見てきてくれたんですか？」

「ん、チラシですか？ ボクこの駅に来たのは初めてなんです。新しい町だから飛び込みして来いって部長に言われて...。でも、マンションは入り口にセキュリティがあって入れないんです。そうだ！店長どうですか？キャッシュで持っているより「金」に換えた方がいいですよ！資産形成は...」

「いや...キャッシュもないからごめん」

(どうしてだろう...
平日はあまり飲みには行かないかな...仕事もあるだろうし、じゃあ来るのは週末かな)

オレはチラシのお客さまが来ない理由を無理やりにでも作ろうとしていた。

そして金曜日、

やっぱりチラシを持ったお客さまは1人も来ない。金曜日なのに店内はガラガラだ。

（今日は何かイベントでもあったっけ？ サッカー日本代表の試合があるか？

いや無い、何も無いと思う。あったらいいのに...）

何とか正当な理由をつけたかったが、適当なものが見つからない。店の外へ出てみると、100m先に見える大手チェーンは満席の様子。「いさみあし」に鳴く閑古鳥は、単に人気が無いだけだった。そう気づくしかない状況になった瞬間、オレの右耳がビクン!と反応した。

「ビール1杯サービスだってよ！」

歩く人の話し声、それはウチのチラシだ！

つづく...

「いさみあし」に来店する理由。

「ビール1杯サービスだってよ！」

オレの耳がビクンと反応した。歩く人の話し声。

（それはウチのチラシだ！）

本当は割引なんかしたくないけど、この際仕方ない。チラシにはビール1杯サービスのクーポンを付けておいたのだ。

「へえ、行ってみようか！」

そう会話するカップルは「いさみあし」には目もくれず、店の前を通り過ぎて行った。

（あれ？ここだよ...？ビールサービスの店は...）

カップルが向かったのは、100m先のあの大手チェーン店だった。駅の方を見ると若い男がチラシ配りをしている。オレはその男に駆け寄り、ふんだくるように1枚受け取った。

《生ビールおひとり様1杯サービス券》

「くそっ!!! マネしやがったな！

オレが世紀の大発明、生ビール一杯サービスを...」

ギュッと拳に力が入った。

「そんなのどこでもやってるわよ！」

後ろから声が聞こえる。

振り向くと薄ピンクのブラウスを着た女性が立っていた。

「イサッチ！どう、元気？」

マミだ。

大手が開店してもマミだけは変わらずにウチに来てくれる。

「いさみあし」にとって一番の得意客だ。年齢は恐らく俺と同じくらい。結婚はしていない様子。お世辞にもスリムとは言えないがいつも綺麗にされていて上品さがある。明るい笑顔もチャーミ

ングだ。

「ああ、いらっしゃい」

「何よお！どうしたの？元気ないわねえ」

マミの顔を見るとなんだかホッとする。

オレは気持ちを落ちつけて、店内に戻った。

「いや...最近なかなか厳しくてな。今までウチに来てくれていたお客さまもみんな大手に行っちゃってるみたいなんだ...」

「ふ～ん、そうなんだ。みんな浮気っぽいよね。アタシは一途だけどなあ」

その日、マミのおごりで焼酎を2杯飲んだ。

こんな時はストレートにレモンを1枚つけるのが体に効く。

翌日になり、オレはひとつ決心をした。同じチラシを配っても大手に勝てるわけがない。

大手がビール1杯ならウチはもっとやらなければお客さまには振り向いてもらえない。思い切って1000円引きのクーポンを付けよう。また5万円が飛んでしまうのは辛いけど仕方ない。オレはもう後には引けないんだ...

印刷屋さんに無理を言って、新しいチラシは2日で仕上げてもらった。

新しい武器を手にしたオレは、早く配りたくて手がムズムズしていた。

「これで、あの店に勝つ！」

その晩、オレがペダルを漕ぐペースは、前回よりも早かったと思う。

ヨシオが夢に出てきた。笑顔だった。

そして翌日。

来ない...、やっぱり明日か...

あれ...？ やっぱり金曜日か...？

脳裏によぎる嫌な予感。頭に浮かぶヨシオの顔も少し不安そうだった。

おかしい。

金曜日になっても、チラシを持ったお客さまは誰も来ていない。
店内はガラガラ、何度か顔を見たことがあるお客さまが数組いるだけだ。
嫌な予感が確信に変わろうとしたその時、入口の扉が開いた。

「すみません。このチラシって使えますか〜？」

ついにキタッ!!

「もちろんっ!! 何枚でもっ!!!」

振り向くと、薄水色のブラウスを着た女性が一人、ウチのチラシを持って立っていた。
「ラッキー☆このチラシがウチに入ったの！来ちゃった！」

マミだった。

1週間ぶりだ。いつもは週3回きてくれるのに、そういえば今週は今日が初めてだった。
5万円かけてチラシを作って、1000枚配って来てくれたのは1名だけ。
しかも常連のマミ…。残念にもほどがある。

「アッハッハ！」

チラシなんてほとんど見ないわよお。ポストには毎日い〜っぱい入ってくるんだから。そのまま
ゴミ箱行きね」

言われてみれば、深夜にチラシを配りながら何人もチラシ配りの人とすれ違った。
各ポストには既に何枚も別の店のチラシが入っていた気がする。

(でも、マミは見つけてくれたじゃないか...?)

「アタシはイサッチのファンだもん。チラッと見ただけで分かるわ。
チラシ作ったのも知ってるしね！」

(そうかあ...)

この話はショックだった。事実に基づく客観的な意見はかすかな期待をすべて打ち砕き、嫌な予
感を確信に変えるものだった。マミの水色のブラウスが灰色にみえた。

ヨシオの定期を崩しただけでなく、10万円を無駄にってしまった。
父親どころか、人間失格だ。。。

ヨシオの表情は暗くて見えない。いや見たくないだけなのかもしれない。

落胆するオレにマミがかけた次の言葉は、暗闇の中で周りを小さく灯すマッチの火となった。

「こないだね！新橋のお店に行ったのよ」

カウンター席について、一杯目のビールをグイッとやると今週の出来事を話出す。マミのいつものパターンだ。

「タカシに聞いてさ、いい店があるって」

(タカシって誰だ？)

「そのお店って、焼鳥屋さんなんだけど、タレがスゴイのよ
江戸時代から200年も注ぎ足して使っているんだって。スゴくない？200年よ。
キャー行ってみた～いっておねだりして連れて行ってもらっちゃった」

なるほど、だから今週は一度も来なかったのか。
そのお店とタカシとやらの、少し嫉妬を感じた。

「なあにムスっとした顔してんのよ～ イサツちらしくない～」

「いや...別に」

「ちゃんと聞いてた～？ 200年のタレだよ。

これだけで行きたくなっちゃうよね！」

ん？ これだけで...？

マミのその言葉が何かひっかかった。

(つづく...勲夫はどうなるのか？「いさみあし」は...？)

200年じゃなくても。

「ちゃんと聞いてた〜？ 200年のタレだよ。
これだけで行きたくなっちゃうよね！」

ん？ これだけで...？
マミのその言葉がひっかかった。

200年続くタレのあるお店になら行ってみたい、か。
なるほど、それならオレも行ってみたい気がする。一度行きたくなる魅力があるな。

ウチはどうだろう...特別な商品は何もない、なんでも置いてある小さな居酒屋だ。
お客さまが行きたくなる魅力は...悔しいけれど見当たらない。
もしウチにもそんな魅力があったら、お客さまも来てくれるのかな・・・
そういえば、マミはなんでうちに来てくれるんだろう...？

「なあ、マミはなんでうちに来てくれるの？
200年のタレもないし、あの大手チェーンほど安くないし...」

「そんなの決まってるじゃない！イサッチがいるからよお。
アタシはイサッチがいれば、それでいいの」

マミの頬はほんのりピンク色に染まり、目はトロンとしている。
既に酔いが回っているようだった。
本気か冗談か...ちょっぴり本気であってほしい気持ちもする。
それが本気かどうかはおいといて、それも一つの魅力かもしれないとも思った。
先程真っ暗闇となった心の中で、1本のマッチにぽっと火が灯ったような感覚だった。

新橋の店には、行ってみたいという魅力があるけど、ウチにはそれが無い。
特に行きたい理由が無ければわざわざ高い店には行かない。
当然だと思う。それが今のウチと大手の構図なのだろう。
でも逆に考えれば、ウチにもそういう強力な魅力があれば、大手にも勝てるんじゃないか。
チラシの時とは違った感覚だった。マッチの火はどんどん大きく膨らみ、ローソクに移ったよ
うな気がした。
その晩夢に出てきたヨシオの表情は心なしか明るかった。

「いさみあし」にも、お客さまがどうしても行きたくなるくらいの魅力が作れないか。
その後しばらくは、そのことばかりを考える日々が続いた。

ウチは5年目の店だからな...

伝統は無いし...

200年なんて到底無理だ。

悩んでいる間にもローソクは少しずつ減っていく。

崩したヨシオの定期の残高も少しずつ減っていった。

探し物をはじめると目に入る情報も変わる。

ある時、ガラガラの店内でお客さまの会話に耳が反応した。

今までならきっと聞き流していたような情報だろう。

「なあ、お前ビジネス発想源ってメルマガ知ってる？」

「ビジネス発想源？何だそれ？知らないなあ...」

(ビジネス発想源？何だろう...?)

「知っという方がいいぞ、読者は15万人もいるらしい。毎朝ビジネスに役立つ情報を送ってくれるんだ。きっと役に立つ。無料だし取っというて損はない...」

(ふ～ん、15万人はすごいなあ...オレの役にも立つかなあ)

「そのメルマガは、もう2100回以上も配信されているんだけど、著者の弘中さんは100回ごとに必ず言うことがあるんだ」

「へえ...何？」

(へえ...何それ?)

「何かを始めると決めたら100日続けましょうってこと。1日とか2日で分かった気になって辞める人が多いけど、少なくとも100日は続けないと分からないんだって。だから100日の継続を薦めているんだ」

「へえ100日...」

(へえ...100日かあ...)

「100日って連続で100日だよな？」

「あたりまえだよ、100日連続。3ヵ月チョイだな、やればあつという間だよ」

「いや、3ヵ月って言えばカンタンそうだけどさあ...オレ飽きっぽいし」

(オレもだ...今まで腹筋も禁煙も1週間だって続いたためしが無い)

「そうなんだよ！だからこそ続ける人はすごいんじゃないかな...続かない人が多いってことだとも思うよ...」

(だろうなあ、続かないよなあ...ん?)

その言葉が引っかかった。

普通は100日でも続かないということは、100日間というのは価値がある期間なのかもしれない。200年は無理だけど3ヵ月くらいなら資金もぎりぎりもつ。100日ならできそうだな。100日間の商品を作ってみるのもありかもしれない。少し希望がつながった気がする。心臓がドッドッと鼓動をうつのを感じた。

でも...200年のタレと比べたら100日のタレはじゃ弱いよなあ...

何かタレじゃないもので、100日でも価値を感じるものはないか...

カウンターの中から店内をぐるりと一周見回す。

すると、あるものに目が留まった。

それはオレに気付かれるのを待ちかねていたかのように、どんと構えていた。

次の瞬間には、オレの右手はカウンターの下で小さなガッツポーズを作っていた。

「これだ！」

つづく...次回は最終回です。

時間をかけて...

でも...200年のタレと比べたら100日のタレじゃ弱いよなあ...

何か100日でも価値を感じるものはないのか...

カウンターから店内をぐるりと一周見回すと、あるものに目が留まり、
オレはカウンターの下で小さなガッツポーズを作った。

「これだ！」

梅酒。これはオレが自分で漬けているオリジナルの自家製だ。

昔おばあちゃんに習った作り方で、ホワイトリカーではなく日本酒を使って漬けている。

お客さまの中には何人かファンがいるくらいで、結構人気がある品だ。

これなら、オレにもできる！

心のローソクの火がポワッと一回り大きくなった。

「ありがとう、お客さん」

「へっ？」

オレはお客さまのグラスにお代りの焼酎をドボドボと注いだ。

お客さまは訳の分からないサービスに戸惑いながらも喜んでいた。

「なあ、100日漬けた梅酒を作りたいんだけどさ、

今と同じじゃつまらないだろ？何かひとひねりしたいんだよ。何かいいアイデアない？」

マミに相談をした。

「う～ん、何だろうなあ...やっぱりイサツちらしいのがイイよね」

そうだな、せっかくやるんなら他にはないウチらしさが欲しい。

オレらしいものあ...何だろう。おばあちゃんの梅酒にオレらしさを加える...か。

それから、オレは毎晩新しい梅酒の研究に励んだ。

梅の種類を替えてみたり、日本酒だけでなく、芋焼酎や麦焼酎、白ワインやブランデーを加えてみたり、10日間で30種類以上は試したと思う。深夜2時3時までかかることも多かったが、これま

でとは違って辛くなかった。

そして、なぜかいつも隣にはマミがいた。

「よし、今日はコレでやってみよう」「うん」

いつものように日本酒を取ろうと棚に手を伸ばした瞬間、オレの右手とマミの左手がふっと触れた。

マミの手は柔らかい弾力で優しくオレを押し返してくる。

「おっとごめん」40歳の男女の頬は初めて恋をする中学生のように紅く染まっていた。

「よし! コレで行こう!!」

ようやく味が決まったのは、それから1週間後。

仕込み終えた梅酒は、甕の中で100日間寝るだけとなった。

現時点では期待の持てる味だけど、100日経ってどう変化するかは分からない。

期待も大きいけど、やはり不安もあった。

「アタシ、あの甕を毎日見てたいな」と言うマミの希望もあって、仕込んだ甕はカウンター席の正面に置いた。

「10月20日解禁」と書いた札を貼ると、カレンダーをめくるのが日々の楽しみになった。

梅酒解禁まであと70日。

時間が経つのは遅いのに、お金が減るのは早い。

ヨシオのカネも底を尽きかけてきた。ローソクも残りあとわずかだ。

まずいなあ...あと70日ももたないよ。

早めに解禁しちまうか...

と誘惑に駆られるたびに、マミの言葉が思い出される。

「アタシとイサッチの約束ね。100日目の解禁日には最初にアタシに飲ませて」

やっぱり駄目だ。約束は破れない。

オレが勝手に決めた約束だけど、ヨシオとの約束は破ってしまったし...

ある日。

カウンターに座ったお客さまから質問された。

「あれ、何？ 10月20日解禁て書いてあるやつ」

「あれですか？梅酒なんですよ。100日間寝かせている最中でして、解禁日が10月20日なんです」

「へえ...梅酒？」

「普通、梅酒ってホワイトリカーがベースなんですけど、ウチの日本酒がベースなんです。今回はそれにちょっとしたトッピングをして寝かせているんです」

「面白そうだな。オレも飲んでみたい。10月20日だね、覚えとくよ」

「はいっ！お待ちしております!!」

予想外の会話だった。

マミのわがままで近くに置いた甕がお客様の気を引くなんて。

気を良くしたオレは、それからカウンターに座ったお客さまには、必ず甕の梅酒と解禁日の説明をした。

すると、多くのお客さまが好意的に受け留めてくれた。

「あのお酒、10月20日まで飲めないんだって」「へえ・・・じゃあその日も来る？」

甕を知ったお客さまが、別のお客さまを連れてきて、自慢ぽく説明する姿もちらほら見られた。

これは...イケるかもしれない。

オレの期待は次第に大きくなっていった。

心のローソクの炎は、もう少し太いローソクに移っていた。

それからは辛抱の日々が続く。

解禁日まであと50日、30日、20日...

解禁日が近づくにつれ、ヨシオの残金は少しずつ減っていったが、減るスピードは落ちていた。

逆にオレの期待は高まっていった。もちろん同時に不安も高まった。

お客さまには期待をしてもらっている。期待に応えられないモノになっていたらどうしよう...。

まだ、完成した味は分かっていないのだ。

そして迎えた10月20日。

味の保証が無かったので、今回はチラシを作るのはやめた。

味の確認をして、よければすぐに作って配るつもりだ。

17時、いよいよ開店の時刻。

（結構予告したからなあ、何人かは来てくれるんじゃないかな）

そんな期待も頭をよぎるけど、自分勝手な期待はしても裏切られるだけ。

今回の期待は梅酒の味だけに留めることにする。

そわそわしながら一人目のお客さまを待っていると、ガラリと入口の扉が開いた。

「いらっしゃいませ！（梅酒を楽しみにしているお客さま？）」

オレがパッと入口を振り向くと、そこに立っていたのは、

薄いピンクのブラウスに白いカーディガンを羽織った女性だった。

「来たわよ～☆」

なんだ...マミか

予告してきたお客さまを期待してしまった分、ちょっと残念だったけど、やっぱり嬉しかった。

初めの1杯はマミに。これは約束だ。

100日ぶりに甕のふたを開けると、梅香が鼻先をかすめる。

優しい甘さと、さわやかさが感じられた。

杓子で一杯すくってグラスにそおっと注ぐ。

マミはグラスを両手で大事そうに受け取り、口元へゆっくりと運んだ。

ゴクリ。

（どう...?）

「.....」

マミは目をつぶり、しばらく動かない。

（どうなの...?）

そして、マミはパッと目を開き、大きくピースサインをした。

その表情は、子供が誕生日にプレゼントをもらったような満面の笑顔だった。

「うん！おいしい～よ～イサッチ。大成功☆」

「ほんとか？どれどれ？」

うまかった。

甘さの中にもちょっとだけピリッ舌を刺激する感覚が新しい。

これならいける...お客さまの期待にも応えられるはずだ。

「マミ、ありがとう。マミが手伝ってくれたおかげだよ...」

「イサッチ...」

マミの目からも涙が溢れそうだった。

その瞬間、また入口の扉が開いた。

「来たよ～。解禁日は今日だったよね？」

最初に質問をしてくれたお客さまが、友達を3人も連れての来店だった。

* * * * *

「ねえねえ...今度は何作ってるの？」

「おう、また新しいものを考えていな」

閉店後の深夜2時。

マミはまだ「いさみあし」にいた。

「こないだの梅酒は大成功だったわね！」

「そうだな。梅酒は『時間をかけて』というのがテーマだったろ？」

「大手には時間をかけた商品作りは難しいし、お客さまだって自分でやるのは大変だしな、だからうまくいったんじゃないかなと思ってさ」

「そうよね～。あと、イサッチがイイ男だったのもね」

「...まあ、とにかくさ、1回あれがうまくいったからって、

100日とか梅酒にこだわる必要もないんじゃないかと思ってんだ」

「ふ～ん」

「例えばさ、『1週間煮込んだシチュー』とか『5日間かけて仕込んだローストビーフ』とかよく聞くじゃん。

これだって大手には出来ないし、お客さまも自分でやるのは大変だろ？」

100日かけなくたって、『時間と手間のメニュー』は作れると思うんだ」

マミはカウンター席からオレの研究を見ている。

これも最近の日課になった。

酒を飲んでいる時のマミよりも、この瞬間の方が嬉しそうに見えるのは気のせいだろうか。

「そうね...ガンバロね、イサッチ」

「おう...!？」

「私たちも、少しずつ、時間をかけて...ね」

「えっ!？」

「ちゃんと、手間もかけてね...」

(完...好評ならいつか続くかも...)